

VOLDO 製作記

鈴木浩之(hiros)

今回はソウルキャリバー版のVOLDOを作ってみました。VOLDOのC Gを見ると一見簡単に見えますが、ナムコらしくマニアックなデザインの為 作るのは結構大変でした。

・最初に頭部を作ります

この写真は完成した状態ですが、基本はベルト状のパーツを組み合わせるだけです。ベルトの芯は毎度登場しているソフトフロアクッションです。



ベルトはクッション材を2.5 cm程度の幅で切りそろえて一旦仮組みします。使う部位によって幅は変わりますので、この段階でしっかりと幅と長さを揃えます。



本来は皮で出来ているらしいベルトなので、芯に合皮を貼りあわせて「らしく」します。合皮はC Gイラストなどを複数比較して色を決めます。見た目の出来栄えを決定するものなので「色指定」は確実にする必要があります。さらに合皮の表面加工をある程度吟味する必要があるので、予算と折り合いを付けて入手しました。

各パーツが仕上がったら慎重に接着してください。クリップや「洗濯バサミ」を利用して固定しながら作業すると簡単ですが、表面に跡が残りますのでハサミと「固定する物の間」にシートなどを挟んで直接挟まないようにします。



工房・VOLDO

大凡、組あがったところです。必要なところにハトメや割ピンなどを装飾兼補強として使います。自由に脱着するために後頭部側の目立たない場所にマジックテープを仕込んでおきます。



ハトメやアイレットリングなどを使用するには専用のプライヤーが必要です。手芸店や日曜大工のお店にセットで売られています。

割ピンはデザインナイフ（またはカッター）があれば簡単に付けられるので特に工具は要りませんが、裏側のピンを布やテープで隠さないと服や肌に引っかかって危険です。

変わった物に「かしめ」がありますが、ハンマーと「かしめ用の臼」が必要になります。皮（合皮）関連の工作にはデザイン的に合った補強・結合用の金具として「かしめ」は多用されますので、手芸店などで適合サイズの臼を入手しておくと便利です。



マスクのアゴにあたる部分は扇形で、丁度「二枚貝」などの貝殻みたいな形状です。おおよその形状にサイズを合わせて切り出したら、多少接着しろを多めに合皮を貼っておきます。後は現物合わせで少しずつ変形&固定して、最後に合皮を裏側まで貼りこんで補強をすると出来上がります。



養生中はハサミだらけ・・・

アゴはこんな感じ

正面からと裏返しから見た状態です。表からは分からないのですが、裏側では貼りあわせ構造がよく分かります。



マスク（面）を仕上げます。パーティー用の薄い樹脂製のマスクを塗装して使いますが、インナースーツやレオタードの帽子の色や質感に合わせて塗装しておきます。

全く同じ色の塗料は売っていませんので、複数のスプレー塗料を薄く重ね塗りして見た目が近い状態まで仕上げます。

マスクとインナーを並べてみました。素材の違いでどうしても光沢の違いがありますが、撮影会などの状況下では目立たないレベルになっています。



・頭部完成！

額の接合部はイラストからも分かるくらい特徴のある金具とピンが付いています。本来ならばベルトを接合するための金属プレートとピン（かしめタイプ）と思われます。今回は柔軟性のある方が都合が良かったためにクッション材と合皮&塗装でプレートを、ピンは割ピンを使って「らしく」仕上げました。



プレートについて

切り抜いた芯に合皮を被せます。ベルトを接着で接合しているので強度の心配は要りません。完全に飾りです。

工房・VOLDO

・左腕の腕輪を作ります

基本は変わらないので、各パーツにクッション材を切り出して組み上げます。

ベルト部分には固定用のマジックテープを仕込みます。本来はバックルを使用して固定するのですが、サイズ調節が難しいのと現場で装着に時間がかかるのでバックルはダミーです。

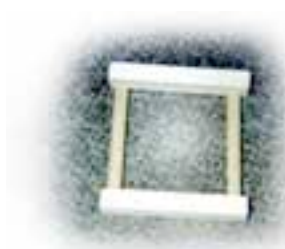


マジックテープの一部

当初はバックル本体を硬質樹脂スポンジでサッサと仕上げる予定でしたが、完成直前に耐久性の問題で急遽木製になりました。結果、見た目にもキレイですが、ほぼ出来上がっているベルトなどに後付でバックルを通すハメに・・・



初めに作ったバックルは厚めで強度に難あり



作り替えたバックルは木製で角棒と丸棒の組み合わせ

このパーツは肘のすぐしたに装着する腕輪で一応完成ですが、左腕は肩を覆う別パーツと網でこのパーツをつなげた構造です。次ページからは左肩周辺の説明です。

・左肩周辺

このパーツのイメージは半袖シャツの袖に相当すると思います。袖ならば布を筒縫いすれば完成ですが、VOLDOの場合はスパイラル状に巻き上げたとても面倒なデザインみたいです。



スパイラル状の部分は腕に合わせて巻き上げ、脇や肩の付近は芯を入れないで巻きます。この辺りの工程を撮影した写真を紛失してしまったので、肩パーツと腕パーツの接合部分やスパイラルの工程が飛んでいます。(フィルム1本分紛失でした・他の工程も含んでいるので痛いです)

肘の近くまで袖口が伸びていますが、袖から先に網と複雑なパターンのベルトで腕輪をつなぎ止めています。ここに使われている網は筒縫いですがベルトも一緒に固定するので、袖口には芯を入れて補強しておきました。上の写真では合皮の縁に白く細長い補強が写っています。



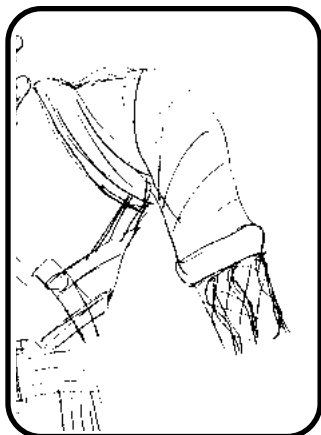
接続部(網)の拡大



肩口まで巻き上げた状態



内側には補強をしています



当初のラフ



出来上がり

・左腕完成!

肩パーツは背中・胸パーツに固定出来るように&装着時に隠れるように工夫します。複雑な左腕ですが装着は簡単です。

網の部分については右足パーツの網を使った接合部分とほぼ同じ工程なので、詳しくは右足の項目を参考にしてください。

工房・VOLDO

・左足（下側）

ここは脛当（すねあて）に相当します。これもまたスパイラル構造らしくて、そのまま作ると装着が簡単に出来ません。そこで前面からの見た目がスパイラルな構造にします。裏側（脛ら脛側）でマジックテープ止めにします。その為にベルトを脛ら脛の各部位に合わせた長さに切りそろえます。（各部位はベルトの幅に左右されます）



後はひたすらベルトを仕上げては組み合わせ短冊のように貼りあわせます。裏側にまわる所にマジックテープを付けて少しずつ丸めます。スパイラルに見えるようにベルト同士を重ねて貼り付けるので、各部位にフィットするようにボンドが硬化する直前に微調整します。



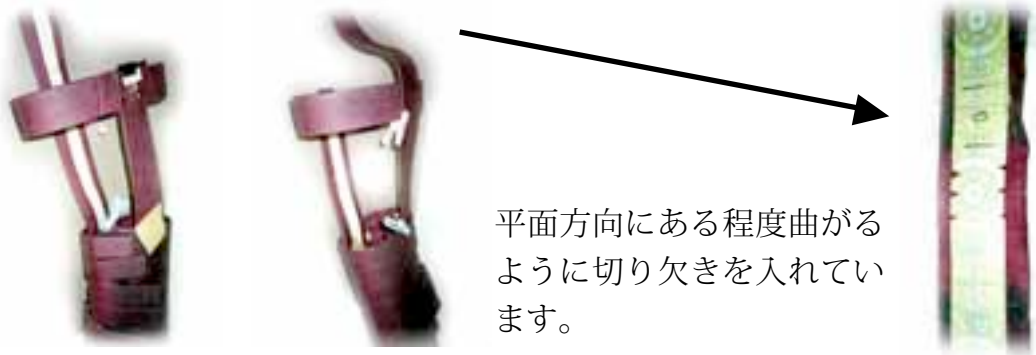
最終的には実際に装着してみて何度か調整します。この際に足には長い靴下や厚手のストッキング又はスパッツ（スキー用など）履きましょう。レオタードの厚み分の補正と、はみ出したボンドの対策です。レオタードで作業するとボンドで汚れますので避けたほうがよいです。



・左足（上側）

この部分は VOLDO のパーツでは簡単な部類です。腰のベルトに吊り下げるための縦のベルト（ややこしいですが）を太股の外側に這わせませす。途中に太股に巻き付くループ（これもベルト）を設け、内股にも縦のベルトをつけます。

内側のベルトはデザイン上つけたのですが、実際にはループがズレ落ちるのをある程度防ぐようです。



腰のベルトに吊り下げる部分は縦のベルトを多少細くしてあります。これは吊り下げの金具などを付けるのではなくて、ベルトを？の様に回して裏側で留める構造にしたためです。（留め具は小型の差し込みで右足も同じです）

ベルトが幅広なままだと前後方向の動きで必要以上に歪みが出て、ベルトが太股から浮き上がります。（実際にはそれでも浮きます・・・）



ベルトの留め具周辺 裏側に差し込み金具が付きます



こんな感じに腰ベルトに吊り下げます。裏側にまわる部分が細くなっているのがよく判ると思います。

ベルトが細くなっている部分で吊り下げますが、それでも強度は十分なので心配はないです。

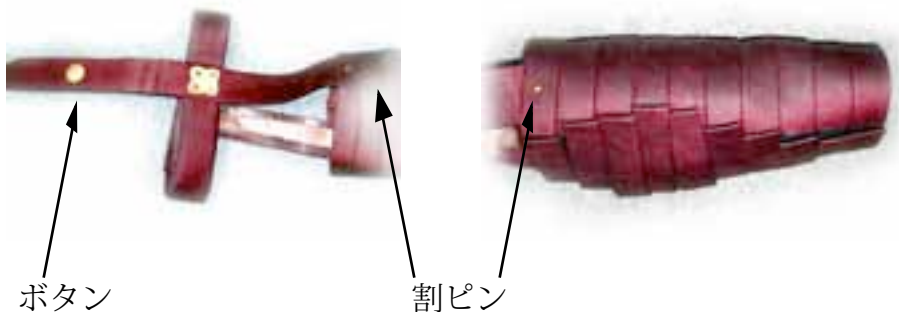
工房・VOLDO

・左足（全体）

左足にも装飾が付きます。本来はベルトを接合する金具なのですが、今回はほとんど接着剤で接合しています。一部の割ピンは補強を兼ねていますが、他はほとんど装飾になっています。



接合金具で大きい物は頭部を作った時と同じ要領で仕上げます。かしめ金具よりも大きな丸い金具は手芸店などで「包みボタン」などとして売られている木・プラ製のパーツを塗装して貼り付けています。



・左足完成！

分割できない結構大きめのパーツですが、これでも本体よりは小さいです。脹ら脛周辺が装着に一番手間取ると予想していましたが案外簡単に短時間で完了します。

歩く時はギブスをしているようで辛いのですが、それも慣れの問題でしょう。ただし、コミケみたいなアップダウンの有る大きめの会場を歩くのは危険です。もっとも、スタジオでしか着たこと無いですけど・・・



・右腕（上腕）

ほとんど意味無いような上腕に装着するプロテクターです。プロテクターとして機能しなくても、デザイン的には目立つのでしっかり作ります。



芯にはプラ製の雨樋を使いました。表面に硬質樹脂スポンジを貼り付け、凹凸の文様に合わせて細く切ったスポンジを貼ります。



さらに、薄いスポンジを表面全面に貼りこんでから合皮を凹凸に合わせて貼って仕上げます。接着中は、強固な雨樋でも接着剤と樹脂の元に戻ろうとする力で変形します。変形してアールが抜がらないようにバンドなどで固定します。1日ぐらい放置するとしっかりと乾燥して接着完了します。

裏側にベルトを取りつけます。腕にはベルトに付けたマジックテープで固定します。軽いパーツなので簡単にズレたりしませんが、実際に装着する際はウラ面のベルト固定位置付近に弱粘着の両面テープを少量使用して固定します。



・完成右腕（上腕）

スプレーで金色に塗装すると完成です。

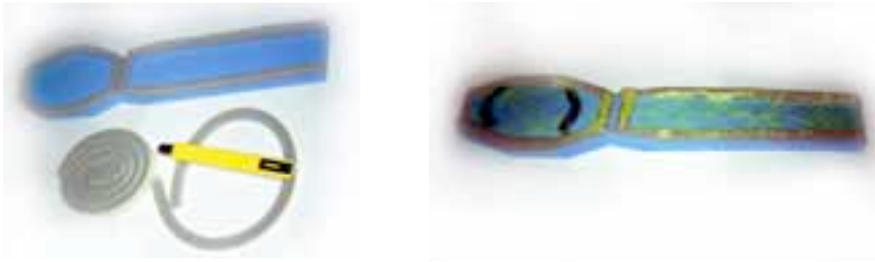
以前からVOLDOは金色のパーツが多いのですが、塗装には「控えめな金色」の選択を心がけないと見た目がきつくなります。



工房・VOLDO

・右足（脛当て）

右足の脛当てはスポンジ素材を芯にして作ります。表面の凹凸は細く切ったスポンジや戸当たりテープ（隙間テープ）を使い盛り上げます。



表面は凹凸がうまく出るように合皮を貼って塗装しますが、このままだと接着の影響で芯が反ってしまいます。補強と矯正を兼ねて裏側に骨を付けました。



合皮を貼った面が縮み変形します 骨は細い木材でOKです。



本来は大きな鉄鉾の頭だと思われませんが、脛当ての表面に5～6個「包みボタン」を設定に合わせて取りつけます。この段階で全体を軽く塗装します。

脛当ての後ろ側、脹ら脛を包み込む部分は、本来皮製で靴と一体になっている気がします。でも、実際に靴と一体に作るとなると大変なので、合皮で脹ら脛を包み込み脛の裏側で留められるようにしました。脹ら脛の形に合うように合皮を裁断すると、両辺がカーブしている台形になります。



・右足（上側）

太股を一周するベルトから奇妙な形のベルトで脛当てを吊すデザインですが、実際には吊す力は架かりません。（むしろ支えられている状態かもしれない）

右太股のベルトから脛当て上部のベルトまで「ワカメ」(笑) みたいな奇妙なベルトを渡します。その表側に丈夫な網を筒状にしてから被せますが、網自体が多少伸縮するか余裕が無いと装着できません。さらに、上下のベルトはマジックテープで開閉と調節が行われるので、それを考慮して網の固定もします。



ワカメ（笑）ベルト



網は孔が～5ミリくらいです

各ベルトは表面に合皮を貼りこんであるお陰で硬くなって作業は大変です。今回、ダークブラウンの網が入手できたのでそのまま使用しています。希望の色が無い時は白い網に着色します。

脛当てとベルトを組み合わせて完成です。脹ら脛部分に装飾に細めのベルトを2本追加しています。脛当て装着時の形状・固定も安定するので、見た目よりも実用性から必須です。

脹ら脛のパーツは全て金色にスプレーしていますが、特にこの部分はスプレーの厚塗り厳禁です。



・完成 右足

目立って難しい所も無いのですが、金色のパーツは目立つので「見た目」を重視する必要があります。

※左の写真では腰に吊すベルトが付いていません。全体写真を参照ください。

工房・VOLDO

・靴（左）

靴は布製のバレエシューズを芯にします。軽くて加工しやすいのでお薦めです。一般に男性用は少なく幅広な物は珍しいのですが、チャコットなど専門店では在庫している場合があります。



加工前のシューズ

つま先の補強とベルトなどの芯

つま先の補強後合皮を貼ります。つま先～踵と仕上げてベルトを最後に取り付けます。このベルトは機能していないのですが、柔らかいシューズの形態保持に役に立ちます。踵から足首方面には15cm程度余分に合皮を残しておきます。余分な部分を脛のパーツの下に潜り込ませると靴と脛のパーツが連続して見えます。



外側から

内側から

バレエシューズは靴底が薄いため、大きな会場を延々歩くと足が痛くなります。(特にコミケは大変です) その予防として靴底を貼るとある程度痛みが緩和されますし、底自体の耐久性も向上して傷みにくくします。既製の靴底でも良いのですが、バレエシューズの底は特殊な形なので「シート状のゴム」を切り出して使いました。



・靴（右）

同じく右側の靴も作ります。手順は左側とほぼ同じで、違うのは使用する合皮の色くらいです。前ページの説明写真には無かったのですが、ベルトの外側にダミーのバックルを付けます。（左右共に作りは一緒です）



つま先から～踵を仕上げます



バックルは1個



靴の加工中に資料を見直していたらバックルらしき物が・・・

すっかり見落としていたのです。

バックル一つで見栄えも大きく変わります。



・完成 靴

バレエシューズがすっかり別物に変身している状態です。改造している所以で耐久性や疲れに不安が有ったのですが、履き心地は悪くないどころか快適でした。（笑）

バレエシューズについて

私が使用しているシューズはチャコット製の布タイプです。ほとんどのサイズは揃いますが、皮タイプの指定色とかE E Eなどは受注生産になります。土踏まず部分に底が無い種類や、底の材質が皮など色々あるので店員さんに相談してみましよう。

工房・VOLDO

・腰周辺（1）

腰のベルト周辺を作ります。VOLDOは毎度おなじみのTバック（ふんどし）スタイルなのです。各部のパーツを支えるのが腰のベルトですから、Tバックを「頑丈&ぴったり」に作らないと後から大変です。芯は他と同様にソフトフロアクッションです。



Tの前部分です。出来上がりが硬い素材なので布製のズボンなどと違って、股をくぐる部分のカーブをきっちり作らないと歩けません。



Tの部分は単純です。順序よく組み合わせていくだけでですが、長さをきちんと合わせないと装着できません。(笑) 特にウエストはある程度調節が出来るようにしておかないと、レオタードの上に装着する時に困ります。



Tの前部

後部



前部とベルト

※今回、固定用のマジックテープは後部側にしています。



・完成 腰周辺（1）

Tバック部分はVOLDOの特徴有るコスチュームでも一番目立つので「VOLDO=変なキャラ」と認識されてしまいます。

古代の戦士・闘士標準の装束なのでしょうが、いろんな意味で毎度説明に困ります。

・腰周辺（2）

ナムコのイラストなどでは腰ベルトから背中中の低い位置まで、ベルトを格子にした様なデザインになっています。当初ここは面倒で困った構造なので、簡単な切り抜きにする予定でした。でも「ここまでやったからには・・・」と思い全てベルトで格子を作りました。



仮り組み



表面に合皮を貼って・・・



平面で組んだままではフィットしないので、装着時の状態に癖を付けて格子の間隔を調整します。その後前ページの（1）で作ったTバックと合わせて余分なベルトを切ると「らしく」なります。



（1）で作ったTバックの前部に「かしめ」を打ち込みます。ヘビメタファンのジャケットに付いているような四角錐の5mm位を装飾に打ち込みます。なんか最強です・・・



・完成 腰周辺

このパーツは強度の関係から、装着時以外も形状を維持できます。逆に、収納時も形状を維持しなければならないので嵩張って大変です。

工房・VOLDO

・背中のベルト

ベルト3本を組むだけです。下は腰のパーツ・脇は胸のパーツ（後述）に接合します。上は太めの留め紐を通して首の位置で留められるようにしています。



・胸周辺

胸の周辺は「く」の字に変形したベルト2本と、網（本来は鎖帷子？）を取り付けします。簡単そうですがこれが結構大変で、ベルトなどはカットアンドトライで割り出した寸法を複写して作ったら「く」の字形になりました。



「く」の字



網は良く伸びる物です

背中と同じように下は腰のパーツと接合、上は首の紐を通しておきます。腰パーツと胸のベルトに囲まれた部分に、ほぼ台形の網を取りつけます。この網は前述の足や腕の部分に使った物と同じで伸縮します。

網の伸縮を利用しながらベルトに固定するのですが、ただの接着では網の縮む力で剥がれてしまいます。そこで網の周囲にワイヤーを通してベルトの裏面で縫うように固定しました。そのままだとレオタードに引っかかるので、上から表面と同じ合皮を貼りあわせて補強と保護を行います。



作業中は養生が大変



「く」の字の片側（私は左）で網を脱着できるようにマジックテープ留めにしました。こうしないと装着そのものが出来ないことが、作業を進めているうちに判明・・・（間抜けです） 脱着できる側の網の周辺部は太めのワイヤーで「く」の字に成形しておいて、マジックテープや補強などをベルトに近い色で行いました。

背中より脇の下を抜けているベルトの先端に「差し込み」金具を付けます。実は背中中のベルトを組む時に、金具の位置が胸ベルトの「く」の部分に来るように調整してあります。差し込みの受け側は胸のベルトに付けますが、差し込む側は背中中のベルト先端に伸縮するように芯がゴムのベルトで延長して付けます。伸縮しない構造だとフィット感が悪くなったり、装着に手間取るようになります。（胸囲が変わる度に手直しするのも大変ですし・・・）



伸縮するベルト

ベルトの芯に幅の広いゴムバンド（サスペンダー用など）を利用しています。表面に合皮を貼らないで、筒状の合皮でゴムを包みます。取りつける時は「最大の8割」に伸びて丁度良い長さまで合皮をシワが出るように縮ませて（靴下がシワになるような感じ）固定します。装着時に適度に伸びると合皮のシワが伸びて丁度良い感じになります。

左右の腰パーツがお腹の部分で間があいているため、お腹のベルトなしの部分が網だけになってしまいます。固定と補強を兼ねて太めのワイヤーで縁取りしておきます。同時に片側（私は左）は脱着可能に加工しないと、前述の装着ができない間抜けな状態になります。



この部分にワイヤーを取りつけます



・これでほぼ完成！

工房・VOLDO

・胸の飾り（クモ）を作ります

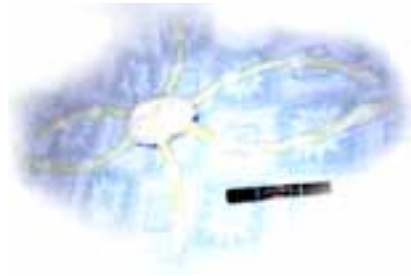
奇妙な装飾品です。クモみたいな形なので私は「クモ」と呼んでいます。中心部の芯は硬質な樹脂スポンジ、6本の腕はビニルチューブを使いました。ビニル表面は塗料や接着剤の食い付きが悪いので、伸縮する包帯を巻いて上からボンドを染み込ませて固めています。



中心部と腕の節に「発泡ウレタン」を盛りつけ硬化したら削りとります。発泡ウレタンは削りながら簡単に成型が可能なので便利ですがカッターの刃がすぐに消耗します。替え刃を多めに用意して切れ味が落ちたらすぐに交換してください。



プードルみたい・・・



中心部にくぼみを付けます

表面の見栄えを良くするために合皮を貼ります。まず、着色を行う部分だけを貼って、金色のスプレーで塗装します。（中心部と節だけ合皮を貼ります）

中心部の裏面は合皮が簡単に剥がれないように、シート（布などでも可）で補強します。中心部表側の「くぼみ」は合皮に切れ目を入れて、きちんとくぼませておきます。



裏面で補強

工房・VOLDO

塗装後に中心部のくぼみに「透明な樹脂製の飾り」をはめ込みます。この樹脂は hidroカルチャーや水槽の敷石に使われている「アイスストーン」と呼ばれている製品を使用しました。観葉植物や熱帯魚のお店・日曜大工店で容易に入手できます。私の場合は量り売りのお店で大きめで形の良い（3 cm くらい）物を購入しました。透明ですが色はグリーンにしました。

その後、腕の節と節の間に合皮を貼って大凡完成します。



腰パーツに固定するにはある程度の強度が欲しいので「差し込み」金具を使用しました。一番小さいサイズを使っています。

下に伸びる腕の腰近くに来る位置で裏面に金具の受け側を、腰パーツの腕に近い位置（お腹に出ているベルト）に差し込みを取りつけています。



胸ベルト側



先端のホック

脇に伸びる腕の先にはホックを取りつけました。この先端部が胸の「く」の字形のベルトの受けに引っかかるようにします。私の場合は丁度脇のベルトを固定する金具の隣でした。ホックの取り付けはワイヤーを使って縫いつけます。ワイヤーを糸のように縫えないので、予め下孔を開けておいてペンチなどで引っ張って作業します。実はホックだと「装着しにくい&装着中に外れやすい」と問題が多いことが後に判明しています。

・完成

私的表現でクモ完成・・・



胸飾りなのか？

拘束具なのか？

防具なのか？ 謎です。

工房・VOLDO

・首輪（笑）

首輪は喉・胸にフィットするように変わった形にしています。全周を同じ高さの襟にすると顎（アゴ）や喉にぶつかって装着できません。さらに肩から胸にかけて底面の形状もカーブが必要です。



底面はソフトフロアクッション・襟は硬質な樹脂スポンジを使いました。スポンジを細かいパーツに区切って底面から立ち上げます。この際、ある程度確度を微調整します。全体的に成形できたら発泡ウレタンを盛って硬化後に削って成形します。装着のために首輪の後ろ側（後頭部側）で切り離します。



モコモコ



切り離し

縦方向の凹凸を表現するために、襟の外側表面に縦方向の細いスポンジを貼ります。（厚めの戸当たりテープを大凡3 cm毎に貼りました）

上から合皮を凹凸が顕れるように貼ります。スポンジ表面には接着剤を塗らずに、くぼみに接着剤を塗布します。後は襟の上下から内側に張りながら折り込んで襟の内側で接着固定します。



合皮を貼る作業は一工程毎に丁寧に行います。特に接着剤が硬化するまで次の作業に移らない方が得策で、固定が甘いのに合皮を引っ張ると凹凸が消えてしまいます。

工房・VOLDO

首輪は全体的に金色で塗装します。その後装着用に用意した後部の切れ目にマジックテープを取りつけます。さらに、胸に着ける「クモ」の上側の腕2本を受け止めるために、首輪の両脇にマジックテープの受けを小さな羽のように取りつけます。当然クモの腕先端にマジックテープの片割れを接着して固定しておきます。



装着用の切れ目



受け側の羽



腕の先端



・完成した首輪

装着すると首にギブスしている気分です。装着感は悪くないのですが、首の自由は少なくなります。喉や後頭部を守るためでも闘士がこんなのを装着しているとすれば、大きなハンディとしか思えないですね。

・右腕（腕輪）

右腕手首に装着する腕輪の構造は簡単です。ソフトフロアクッションを大凡15cm幅で「腕に巻いた長さ+マジックテープの幅」だけ切り出します。上下の縁にスポンジ（隙間テープ）を貼り付けて厚みを出すようにしたら、上から合皮を貼り付けます。この辺の作業は上腕や首輪の作り方を参考に出来ます。後は、マジックテープを腕の内側（手のひら側）で留められるように取り付けます。軽く金色にスプレーすれば完成です。



スポンジで縁取り



滑らかに仕上げます

・完成

とても簡単です。

工房・VOLDO

・カタール（武器）

最近のイベント会場では突起物の持ち込みが禁止されている場合が多くてVOLDOを出せる会場は多くありません。イベントによっては長さで規制を解除している場合があるので、今回も刃の部分が取り外せるようにしました。



本体の手甲の部分は右腕にも使ったプラ製の雨樋です。コレに握りやすい幅の板を渡して固定します。雨樋の縁が偶然丸棒を通せる構造なので、縁に刃と反対側に伸びる「腕を守る」と思われる棒を取り付けます。甲の表面にはフロアクッションを形を整えて貼り付けます。



刃の固定はマジックテープ 棒は多少ふくらみ付き



途中経過のフィルムを紛失したため詳細がありませんが、甲の部分は文様らしき物を凹凸で表現します。やり方は右腕パーツの作り方と同じです。表面に金と銀でスプレーしてから薄くクリアーグリーンを吹いています。

3枚の刃が交差する表側の位置にボタンで飾りを付けます。本来は刃の支点になる留め金でしょう。



・完成したカタール

何度もVOLDOを作っていると、カタールの作り方だけはどうなるのもです。

・全体

キャリバー版のVOLDOは夏コミ直前まで仕上げに掛かってしまい、コミケ直後の撮影会にて初めて装着した衣装でした。会場で初めて組み合わせる各部のパーツなので計算通りに装着できるか冷や汗ものでした。初合わせにしてはトラブルが無く「ソウルエッジ&ソウルキャリバー」オンリー(!)の撮影会に無事出られたわけです。



背中

左から順に頭から足までの写真です。(右端に背中も載せてます) 体型が純日本人なので「彼方の国」のキャラクターはかなり辛いです。さらに撮影した頃は大幅に横が増えて、コスチュームのサイズ調整機能はその為でもありました。(笑えないです)

背景が暗いのはスタジオ撮影イベントだからです。この日は全国のソウルエッジやソウルキャリバーのコスプレイヤーが揃ってVOLDOも3人! 今後こんなイベントは二度と無いでしょう。思い出になった夜でした。



・完成!

全体的に完成です。

今回のVOLDOは自分が今持っている技術の集大成的なコスチュームとなりました。

今後ここまで面倒なキャラクターは作れないと思います。自分のコスプレで記念的なコスチュームだと感じています。

ソウルキャリバー版 VOLDO
完成 2000 Aug.

歴代VOLDOを比較！

初代から3代目までを並べてみました。それにしても同じキャラクターを3回もよく作ったと自分でも思います。VOLDOの為にチャコットに行ったり合皮を扱うようになりましたから、私にとってこのキャラクターが存在しなければ技術も知識も向上しなかった気がします。



初代はコミケ50，2代目はコミケ53，3代目はコミケ58のシーズンに登場しています。（その間に他の衣装が作られています）コミケ50はビッグサイトの2階，コミケ53は4階，3代目はコミケ58の直後の撮影会と着る場所も移り変わりました。イベントで着るのではなく撮影用に特化していったのも大きな変化かもしれません。

毎回パーツが増えてメンテナンスは大変でした。最良の状態で保管していましたが、現在初代と2代目は劣化の為に処分されて既に存在しません。

（お詫び）本文中で一部写真が不足しています。ご了承ください。

後記

この度はコスチューム製作記V o 1. 5を最後までお付き合いいただきありがとうございました。なんとか形になって皆さんに読んでいただけるようになりました。

今回のVOLDOは初代より3作目で2000年に完成させたものですが、製作記にまとめるのは2001年後期からとなりました。フィルムの紛失や環境の変化などで着手が遅れて、さらに衣装その物の製作も停滞しました。しかし、今後はペースが落ちるとは思いますが創作は続けていきたいと考えております。

今後も仙衣研とメンバー、そしてhirosこと執筆者をよろしく願います。

2002年3月 鈴木浩之(hiros)